

## 家永三郎著「上代倭繪年表」「上代倭繪全史」に對する授賞審査要旨

上代倭繪年表と上代倭繪全史とは、主として文獻資料に據り、上代即ち平安末までの倭繪の歴史を明にしようとした研究の成果であり、年表は研究の基礎たる資料集、全史はその資料集に據つてなされた内容的研究であつて、兩書は姉妹篇として、相俟つて上代倭繪の體系的解明を企てたものである。

上代の造形美術を研究するに當り實際に制作せられた作品の極めて僅少なる現存遺品のみを材料としたのでは到底その全貌を明にすることができない。必ず文獻に現われた逸失作品に關する史料を十分に蒐集し、現存遺品と逸失作品とを綜合して考へて、始めてその發展の經過が理解せられるのである。特に夥しく多くの逸失作品を記録に遺してゐるにも拘わらず、現存遺品の極めて少い上代倭繪にあつては、文獻に據る研究が最重要な仕事となるのである。この點に著目して、文獻にあらわれる上代の世俗畫作品を求め得る限り蒐集し、現存作品をも加へ、これを年代順に排列したのが上代倭繪年表である。こゝには二千四百十四點の作品の製作年代、製作事情、畫題、構圖等が、根本史料に據つて一目瞭然と表示せられてあり、終りに假作物語所見の八十三點の繪畫作品が物語別に列擧せられてある。

かくして蒐集せられた全作品について、上代倭繪の歴史を實證的に究明しようとしたのが、上代倭繪全史である本書は、まず倭繪成立の前提となつた唐繪について詳論し、(第一章)、次いで倭繪發生の年代及事情を考え、(第二章)進んで倭繪を景物畫、風景畫、風俗畫、肖像畫、物語繪等の種目に分類に各種目毎にあらゆる畫題を列擧して、その構圖の復原的推定を試みている。(第三章)乃至(第八章)、而して著者は從來の所謂美術史研究が遺品の様式的研究

に終始しがちなるにあきたらず、國史學者としての立場から、美術を當該時代の社會的文化的諸條件に照し廣い歴史的背景の前に置いて考察せんとし、倭繪の各種目毎にかゝる繪畫を産み出した文化史的要因を追究し、平安朝貴族の生活及びその文化に、それぞれ不可分の密接な關係の存在することを論證している。以上が本書の前半を成すものであるが、後半に於いては、倭繪全體につき、その發達の歴史的背景を考え、その技術的要因として、製作者及び製作技術の發達に就き、又その内部的要因として、繪畫要求の精神に就き、それぞれ詳細な事實を擧げて上代倭繪の歴史的母亲を解剖している。(第九章、第十章)、次に上代倭繪の特色限界等を論じて、その内容が日本の特質に、富むと共に貴族の狹隘なる關心に限局せられた憾あることを説き、(第十一章)、最後に、上代倭繪と中世大和繪水墨畫、近世日本畫等との關係を論じて、上代倭繪の歴史の意義に考察を加え、幕末の浮世繪風景版畫に上代倭繪の精神が復活せられたと斷じて章を結んでいる。(第十二章)。

この研究は、著者自ら専ら文獻資料に據る上代倭繪の文化史的研究と名づけている。又、その特色は豊富なる文獻資料の驅使と、文化史的觀點からの考察とにある。兩書を通じ、涉獵利用した文獻は、六國史を始め、公私の記録古書法制和歌漢詩物語等あらゆる種類のものにわたつて、殆んど餘す處なき觀があるのみならず、之を引用するに當つて、一々嚴密なる批判と考定とを加えて居る。従來倭繪についての研究は、扶桑名畫傳、考古畫譜等の類より、最近の諸家の論說に至るまで、その例必ずしも尠しとしないが、かくの如く豊富なる文獻について資料を漏らさず蒐集し、且つ學問的な批判を加えて、その上に研究を大成した例は未だ曾てこれ無く、この點に於いて、本研究は學界未墾の新天地を開拓したものと稱するに足るであらう。

又從來の研究が、美的鑑賞に偏重する立場から、様式的考察に止まる嫌の多かつたのに對し、美術を單に美術として抽象的に取り扱うことなく、時代及社會の背景の前に置き、廣い視野に立つて考察するのみならず、必要に應じて、屢々大陸及び朝鮮半島の畫界との連關にも論及し、單に日本史のみの立場に踟躕して居ない。この點も又この研究の特色と稱すべきものであつて、よく歴史的研究たるの名と實とを全うするものといふべきである。かくの如く、この研究は繪畫史の研究を新しい角度から行つた試みとして、方法論の上からも注目に値するものであるが、内容に就ても、今まで十分明にせられていなかつた上代倭繪の全貌を、白日の下に照し出した功績は、頗る大なるものがある。從來の美術史書の、上代倭繪について記事を本研究と比較して觀るならば、著者の研究の齎した處の如何に大なるものがあるか、理解せられるであろう。千數百年來連綿として今日に傳わる日本独自の文化的所産たる大和繪の源流が、この研究によつて始めて組織的に解明せられたのである。この他、隨處に新しい見解を述べ、新事實を紹介し、新説を提起した處も亦尠しとしない。所謂太宗屏風は實は太宗屏風であつて、趙宋の國名と關係なしとした考證の如き、(三二—三四頁)造酒佑有富なる新しい畫家を發見した如き(三八〇頁)その例である。

然しながら、以上述ぶるが如き本書の特長は、又一面この研究の限界をも示している。専ら文獻を資料とするこの研究では、現存遺品への顧慮も無視せられてはいないが、十分であるとはいへ、難く、(著者の理想とする)遺品と文獻との兩資料の綜合の上に立つ研究の理想には、猶關くるものあるを認めざるを得ない。また繪畫を時代的社會的、背景に依り、理解せんとする文化的考察は、歴史家たる著者得意の場面であるが、同時に繪畫の外面的理解に傾き、藝術的に即した理解に疎なるの感あるを免れない。然しながら、かくの如きは、遺品の研究を自らの専門外として故ら

に考察を避けた著者に向つて、強いて完きを要めるものであつて、その材料豊富にして殆ど之を網羅し盡せりと稱するも不可なきこと、研究方法の斬新なること等は、本書をして不朽ならしむるものといふべく、その學界に貢獻する所實に大なるものがある。